

# 障害児体育（その一）

中 野 紀 明

## 1 障害児と保育

### (1) 障害児の早期発見

人間の持つ機能のほとんどは、生後に育つものである。その基本として、生来反射を獲得反射に組織しな(注1)おす過程がある。もし生来反射が不足していたり、その機能が弱かったりした場合には、それをおぎなうための働きを、獲得反射を身につける過程で織り込まなければならぬ。反射は、人間の行為となる時には、ひとつひとつが単独で働くことはない。獲得反射は、複数の反射によって行為として構成される。生来反射も単独に見ることのできる反射を総合化させることができる。これは、姿勢や体の動きの上の反射によくみられる。生来反射の弱さをおぎない、獲得を進めるためには内部刺激を大切にしなければならぬが、こうした反射の総合的作用によっても力の弱さを克服する必要がある。(注2)  
(注3)

受容機能や求心性神経、および中枢神経の働きも、生後に育つが、その主な時期は乳児期である。みる、きく、ふれる、動きを知る、味

を感じる、においを感じるなど、その感じる力の獲得は乳児期である。「障害」のある子供に、受容においても、不自由さを加えるのではなく、その育つ大切な時期に弱さをおぎない、「障害」を克服する保育をすることは必要である。

幼児期、児童期と継続して受容機能（感覚）をどのように高めるかという問題がある。たとえば、視力は生後約一年で一・〇に到達するといわれるが、色彩や形態や空間などの視覚は、その後も長期にわたって発達をする。そして、受容器がどうしても十分に機能し得ない時には、これにかわる機能を作り出さなければならぬ。こうした場合には、考えなければならないことのひとつに、受容機能も、複数の機能が協応（調整）し、総合的に力を発揮して、育てていく側面があるということがある。子供の全体的な発達を意図しながら、受容機能の力を全体的に用いる保育の工夫が必要である。つぎに、そうした受容機能を育てるためには、各種の刺激を、だれが、何によって、どのように与えるかといったことも大切になる。

人間の場合、器用な働き、高度な働きに関する脳、神経も、生後に

そのほとんどの機能が発達していく。その初期であり、しかもいちじらしい成長期である幼児期に、脳、神経の働きを育てる力となる刺激の与え方は、非常に大切であるといえる。

ひふからの刺激でも、乳の飲ませ方、おむつの換え方、あるいは抱き方などの問題がある。衣類の着せ方や、ふとんの使用方法もある。外気浴、水浴、日光浴なども大切である。軽いマッサージも大切である。それらを、親しいおとなの直接的な働きかけのもとに行うことが必要である。

目からの刺激は最も大切である。向かい合ったおとなの笑いかけから始まり、仰臥している時に胸の上にさげられている玩具や、手にする玩具、あるいは自分の手などを眺めることなどからひろがっていく必要がある。寝ている時も、一定方向からだけ光を与えるのではなく、変化が必要である。また、生後一年間の視力の発育の過程では、強く変化の激しい光の刺激を避ける配慮も必要である。

耳からの刺激も、難聴状態から生後八ヵ月ころまでには、約〇デシベルになると推測されている。聴覚は、生後一年ころにはことばのものと変化などを聞きわけける力ができ、さらにその後長期にわたって発達していくが、少なくともその一年ころまでは、人間の直接の言語刺激を遊びや生活で与えても、機器音による刺激は除く必要がある。遊びの中で、自ら打ちならす玩具音程度にとどめた方がよい。

筋肉からの刺激も、器用さを養う運動の基礎として、姿勢や移動のための手、指の働きの獲得期には、はう、すわる、立つ、歩くという

発達の順序性を大事にしながら、子供自身の力の発揮を尊重し、器具を用いないで、質を正しくし、量を多くしながら育てた方がよい。そのためには、赤ちゃん体操や幼児運動はぜひ加えたい。

## (2) 乳・幼児期における保育の原則

乳、幼児期の子育てについて、親や保育者が心得ておかねければならないものとして次の三つの事柄をあげることができる。

① 親しいおとなと子供が、向かい合ったり輪になった状態で、楽しく遊ぶことである。遊びによって声を出して笑うことが多くなる。

② めざめと睡眠、食事、排泄などの、生活の基本的なリズムと習慣を正しくし、バイオリズムの健康な発達を図ることである。

③ 全身を動かす活動、微細な手、指などの器用な働き、この両者を共に子供の生活や遊びの中で十分に行わせて、全身の筋肉の運動を豊かに育てることである。

遊びの細部については割愛するが、両親がそろって遊ぶ楽しみを身につけて毎日積極的に行う努力をした時は、確実に「障害」は軽減する。特に機能面（におい、味と食事、ひふからの刺激と筋肉の動きからの刺激、耳からの刺激、眼からの刺激、他人からの働きかけに対する反応、集団に対する反応、かむ働き、飲む働き、声を出す働き、抱きつく働き、姿勢、他人に向かっている働きかけ、歩行、涙の分泌、唾液の分泌、鳥肌、排泄、排尿、発汗、体温調節、その他の自律機能、興奮と抑制、不快の情動、快の情動、興味と関心、意欲と意志と努力、耐性、遊びや手伝い、感情の安定性と行為の目的性と感情的価値、記

憶力と注意力、知覚と認識)の克服が速い。片親もしくは両親共に子供との遊びがうまくいかない場合は「障害」の軽減は遅れるし、時によると重くなっていく子供もいる。

両親と子供の遊びや関係によって、コミュニケーションの発達にも差異がでることは、当然のことである。

人間が生命を維持するためには、生体のリズムを確立していくことが大切である。生体リズム(バイオリズム)をくずすと、「障害」の症状は重くなっていく。子供の発達にとって睡眠を十分にとることと早起き、早寝は必要条件である。夜、眠りたがらない子供はおとなの生活が反映して生体リズムをゆがめていることがあるし、また、日中の活動不足から大脳の使用が少なくて眠りをあまり必要としない場合がある。また、夜に入って電気器具による刺激で脳が興奮して眠れなくなっていることもある。いずれにしても、眠りの少ない子供の多くに、一日を通じた活動の不足がみられる。

食事についても、間食が多く、砂糖や人工甘味料、調味料やリンなどを大量にとっていると悪い。朝食が少なくて、朝から活動するエネルギーの不足を累積した生活は体にもよくない。生体における代謝のリズムなどについてもよく考える必要がある。

排泄においても、生体の機序とリズムを考えるべきである。日本人の腸の長さは、一日一回の排泄が必要とされる長さである。そして、副交感神経の機能や胃腸の構造からしても毎日の生活で、食事と栄養の調和がとれ、腹筋の使用が豊かである上に、よく眠り、朝食を正し

くれば、毎朝食後に一日一回の排泄は自然で正常なのである。そうでない場合には、健康生活及び発達上の問題があると考えられている。

排尿においても、起床直後、就床前、食前などのけじめのある所で行い、それ以上の回数は適時に応じて行えば、排泄と矛盾なく豊かな活動と生活のリズムがつくり出せ、排泄について問題を生じることとはなくなる場合が多い。

障害児は、往往にして、便秘気味か下痢気味である。これは、生活の中で生体リズムをゆがめていることと関係していることが多い。

筋肉の使用とその発達は、大脳の発達と非常に大きな相関関係を持っている。特に、乳幼児期においては、それは見逃すことはできない。特に、障害児にとっては、筋肉の発達をうながすことはより大切である。そして、筋肉についても、随意筋を直接使用するその質を正しくし、量を多くする必要がある。

そのひとつとして、姿勢や移動を中心に、全身を働かせる運動が必要である。<sup>(注6)</sup> 背筋・でん筋・脚の筋肉を使用した運動などは大切である。はわずに歩いた子供は、首と協応した立ちなおし反応が悪いし、腕で体を支える力も弱いことがあるので留意すべきである。ふたつには、<sup>(注7)</sup> 拇指を中心とした手の強さと、手指の働きの器用さである。こうした人間独得の基礎的な運動力が望まれる。

(3) 生活や遊びの中で、運動能力を育てる  
子供は、日々の生活を通して発達する。特に、乳、幼児期の一日の

在り方は大切である。乳・幼児期という変化の激しい時期は、発達上毎日が、常に進歩か退行の岐路の連続であるといえる。

「早起き、早寝」をする子供と、「夜ふかし、朝寝」をする子供とは、一日の睡眠時間は同じであっても、その質は違っている。生体リズムが大きく変化することは確かである。ホルチゾール、メラトニンなどのホルモンの分泌が異なるのである。交感神経、副交感神経の機能にとっても、早起き、早寝の方がよいし、太脳の働きにとっても適切であることが考えられる。

早く起きて、戸外へ散歩することによって生ずる太脳の快い興奮と全身の血液の循環のよさをつくり出すことなどを実践すれば、その一日の発達への活動は豊かになる。

朝の散歩のような取り組みでもその仕方についての工夫がいる。乳児にとっては、空気浴であるが、幼児にとっては「歩く」という運動が中心となる。その散歩は、朝食前の方がよい。子供の脳のさめをよくするし、朝食をおいしく食べる要因にもなる。幼児には、坂道を登り、階段を降りるコースなどを織り込むと、姿勢や歩く力をよりよく育てることができる。

坂を登るとき、着地した足は、かかとに力を入れて、その足に体重をかけながら上体を伸ばし前上方に押し上げる。他の一方の足を着地し、いまままで着地していた足を離地に向ける時、種子骨から五本の中足骨の先端あたりに力を入れてかかとを上げる。そして離地するとき、第一指を強くける。今日、靴下と靴をはいた歩行で、しかも舗装され

た平坦な道を歩いている時、子供達の多くは、第一指を用いて歩いている。特に障害児はその第一指を用いない場合が多く、第一指による踏みしめも、けりもほとんど持っていないことがある。坂を登る時の指の使用についてもっと注目する必要がある。また階段を降りる時は、その指や中足骨の先端あたりの踏みしめ、着地の際の姿勢、上体支持の足の力が大切である。しかもより重要なのは、平衡機能の育成である。

脳性まひの人は、坂を登るのと階段を降りるのが困難である。だが、これは脳性まひの人達だけではなくて、障害者一般においても大なり小なりそうであり、乳、幼児の発達においてもそうである。坂を登り、階段を降りることは、土踏まずを形成し、姿勢の力をつくるにも有効だと考えられている。

あるいは、はう運動の重視である。乳児期の「赤ちゃん体操」と、はい方の必要性をもっと重視する必要がある。歩行できるようになった後でも運動や遊びにおいて、はうことを十分にするとよいと考えられる。

はう運動には、(一)はらばい、(二)両手、両ひざ、両つま先を使つての、「六つんばい」、(三)両手、両足による「四つんばい」がある。さらには、「手押し車の運動」も大切である。

動物は、動くことによって生きている。最高度に発達した動物である人間も、幼児期において、そうした動く力を育てるには、「運動あそび」がすぐれている。

河添・平野・清水らは、以前から「遊びから、手の働きを経て、体育・生活・教科の学習が実現し、総合技術教育を行うことができ、生産的・社会的有用労働へ発展する。」と提起している。<sup>(注9)</sup>この人間の発達のみならずは、障害児にも、保障されなければならない。

乳幼児期の活動の中心は、「遊び」、特に体を使つての遊びであり、手を使つての遊びである。障害児教育を実践していく場合に、就学時の「障害」の程度が同様の状況とみられる段階の子供でも、乳、幼児期に保育の手を尽され、発達と「障害」の軽減の道を進んできた子供は、過去においてはより障害が重かった筈であるにもかかわらず、保育されないで来た以前は軽度であった子供よりも、学校での教育は容易になるし効果も大きい。いいかえれば、同じ就学時の力でも、保育活動の充実してきた子供は、未来を開く方向を既に持ち始め、力を発揮しやすい。その保育活動においても、「体育」を第一義にあげたい。<sup>(注10)</sup>

## 2 障害児教育の課題と体育的遊びの必要性

「子供の体がおかしくなってきた」ということが六〇年代から問題になっている。文部省はこれらを「体力がなくなってきたのではないか」ととらえ、体力づくりに取組むようにと、学習指導要領を改訂した。全国的な取組みにもかかわらず、子供の体のおかしさは進行している。一体、体のどこがおかしくなっているのであるうか。これが正確にとらえられないと、一般的な体力づくりを進めるだけでは間に合わないことがはっきりとしてきた。

「子供の体の変化に合った保育、教育を」ということを考えざるをえない。

この「体がおかしい」というのは、疾病とか異常とか直ちに云うわけにゆかないものが多い。建康診断の結果、子供達の疾病、異常の罹患率は、う歯と視力一・〇以下の者は増加の傾向にあるが、他は減少傾向にある。健康問題は学校保健統計でみる限り、心配はない。しかし、どこかが「おかしい」と感じられている。それは長い間子供の集団を見てきた保母や教師達が、日々の実践のなかでとらえた発見である。「今までの子供には、なかった」というような体のおかしさを集めてみると五〇項目にものぼる。実に多様な現象で問題が進行している。

しかも、ほぼ全国的な規模で同じ性質の問題が進行している。

このように「体がおかしい」のではないかと九割以上の保育園、幼稚園、小学校で実感されていたのは、次のようなことであった。

(保育園、幼稚園)

指吸い、う歯

(小学校)

朝からあくび、背中ぐにや

このように「子供の体がおかしくなってきたのではないか」と、実感されていたことは、「体力がない」ということではなかったのである。

このほか、体のおかしさとしてあげられている上位群には、「すぐ疲れたという」「アレルギー」「つまづいてよくころぶ」「ころんでも

手がでない」「奇声を発する」「ブランコで落ちる」「保育時間中に目がトロン」「休み時間ボー」「肩こり」「まばたきが遅い」「低体温」などがある。

このような「体のおかしさ」は、あたかも障害児の体のようなものであるというのが、障害児教育者の感想である。最近では日本の子供はみな障害児であるとする考え方で出てきているほどである。

障害のある子供も、障害のない子供も、共通して「体がおかしい」と感じられるということは、示唆に富んだことからである。障害のない子供でも障害のある子供と同じような生活をしていれば、同じような「体のおかしさ」が出てくるかもしれないのである。また、障害のある子供は、障害のためにそのような「体のおかしさ」が生じたのではなく、障害のために、ある生活を余儀なくされているところから生じた二次的なものであろうということをこれらの事実は示唆している。したがって、障害のある子供であっても、障害のない子供であっても、「体のおかしさ」を何とかしようという取組みを考える時、まず生活のし方を問題にし、対策を立てることによってこれらの「おかしさ」の中の多くのものはなくなるかもしれないという展望をもたせてくれるものである。

ところが、最近、このような「体のおかしさ」は微細脳の損傷によるものであるという考えも出されている。この考え方から、「体のおかしさ」は障害によるものであるから、それに対する取組みは無駄であるという考えが生れることも案じられているのである。

最近の「子供の体がおかしい」ということのなかには、あるいは微細脳に損傷があるかもしれないし、あるいはそういうことがないかもしれない。どちらの場合であっても、そのような「体のおかしさ」が進行することを何とかくい止め、体や心をもっと発達させたいと願っている。そのために必要な保育、教育の課題を考えようとするのが我々の立場である。「おかしい」と思うところをとりあげて、これらを放置しないで、何とかしていこうというのが我々の立場でもある。

その為にも、「体のおかしさ」を一体どのような問題群、あるいは症候群としてみるのか、ということを知明しなくてはならない。

これらのなかの、「朝からあくび」や「保育時間中目がトロン」、  
「休み時間ボー」ということは、大脳の覚醒水準とその日内変動にかかわる問題（多くは、発達のゆがみとしてとらえられる問題）である。しかも、発達のゆがみは幼児期においては、大脳、脳系に主としてあらわれ、小、中学生になると筋肉系が主なものとなってきている。恐らくこれらの発達のゆがみが、積み重ねられて、やがて自律神経系や循環器系の症状となってあらわれてくるという進行をするものと予想できるのである。もし、体の問題が、このように大脳、脳系から筋肉系に、そしてやがて自律神経系や循環器系に発展していくとすれば、我々は、これらの進展をくいとめる為に、大脳、脳系の発達と筋肉系の発達に注目し、発達のゆがみをなくする取組みを創造しなくてはならない。

保母や教師の実感をもとにした考察にとどまらず、事実についての

調査をすすめることによって、事態はより正確にとらえられていくだろう。

このような子供の「体や心のおかしさ」、あるいは障害児について研究をすすめようとする時、「発達のすじ道はすべての人間に共通している」という仮説、また、「発達の遅れやゆがみ」、「退歩」にはすべての人間に共通する順序や法則があるという予想は、両者の研究をお互いに交流しあい、比較しあわなければならない。お互いの発達過程や発達課題をくらべあうことにより、お互いの保育、教育の課題がより鮮明になることであろう。こうした展望のもとで、最近の子供の体の事実調査から、いくつかの問題をとりあげてみる。

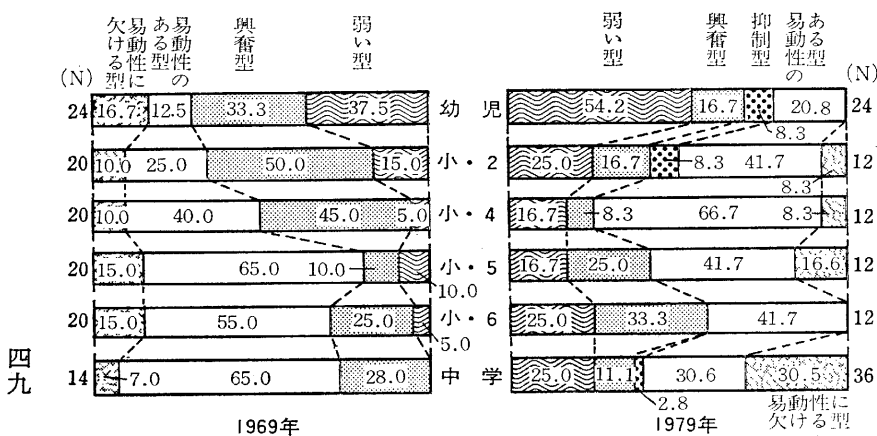
最近の子供の脳活動の型はどのように変化してきたのか。西條らは一九八一年に、幼児から中学生までの脳活動が十年前の子供とくらべて、①興奮過程も抑制過程ともに弱い型がふえている、②興奮過程が抑制過程よりも強い、仰えのきかない「興奮型」が少なくなっている、③小学五年以降も「弱い型」が減少せず、「興奮型」がふえている、など大きく変化してきていることを明らかにした。

つまり、小学四年生までの子供に興奮過程が、強くなっていない（子供らしい）仰えのきかないくらい元気の子が少なくなっている（という）ことであり、こうした変化が思春期になっても「幼稚性」を残す（大人らしくきれない）結果を生み出しているのである。

この結果は、幼、少年時代にもっと興奮過程も抑制過程も強くなるように（特に興奮過程がより一層強くなるように）、発達させなくては

ならないという保育、教育の課題を提起しているといえる。もっと「子供らしく」夢中になり、熱中して遊び続けられ、仰えがきかない

図1 子どもの脳活動の型は10年間にどのように変わったか(注11)

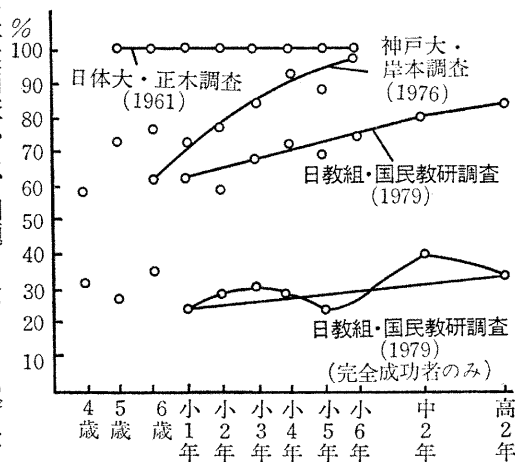


くらい元気のいい「いたずらっ子」にするために、何をしなくてはならないかを考えていくことが要請されている。

この大脳活動の「強さ」は、A、R、ルリヤが分類する脳の三つの基本的機能単位系のなかの、「トーンヌスまたは覚性調節を保障している単位系（第一ブロック）」の特性と考えられる。ルリヤはこの第一ブロックの意義を「至適な覚性の条件でのみ、人間は情報を受容、加工し、必要な選択的連合の系を記憶に呼び起こし、自己の活動のプログラムを作ることができ、また誤りを訂正し、自己の活動の方向性を保つことで、自己の精神過程の経過を制御しうるのである。」と指摘するとともに、パプロフの指摘（「組織化された目的志向的活動の実現は皮質の至適トーンヌスの維持が不可欠である。」）も紹介している。これらは、大脳活動の基礎条件ともいえるものであり、この「強さ」を一定の水準に高めることは、保育、教育の前提課題であるといえるだろう。

さきにみたように「朝からあくび」に代表される大脳の覚醒水準が低いということも、この大脳の第一ブロックの機能の問題であり、子供達は発達上の問題としての大脳活動の「弱さ」に加えて、生活上の問題としての「太陽のあるうちは大脳の覚醒水準が低い」という、二重の問題を大脳にかかえながら生活していることになる。障害児では、発達上のゆがみと生活上のゆがみが相乗的に作用しあうであろうと予想されるので、この前提課題は何よりも最優先して取組まなくてはならない。

図2 筋肉感覚は20年間にどれだけ鈍化したか（「教育評論」1980.6より）



五〇

最近の子供の体の事実調査から、問題としてとりあげなくてはならないことに、「筋肉感覚の鈍化」ということがある。これは保育や教師の実感ではとらえられなかったところである。子供の器用さをしらべるのに「運動能発達検査法」（狩野式）というテストがある。一九六一年に正木らが、一九七六年に岸本らがこの方法を用いて調査をおこなった結果、「閉眼接指」の合格率が顕著に低下してきていることがわかったのである。また、図2にみるように、日教組と国民教育研究所との共同調査「子供の生活環境調査」においても、興味ある結果が得られたのである。すなわち、テストの合格率は一九六一年では幼稚園ですでに百パーセントであったのが、一九七六年には六十パー



セントになり、一九七九年には二十パーセントまで低下してしまったこと。また上級学年になっても合格率が向上せず、三十パーセント程度にとどまっていること、などである。

この「閉眼接指」というのは、閉眼した条件で、左右の腕を肩の前に伸ばして出し、人さし指と人さし指の先を体の前でくっつけることができるかどうかを見るものである。閉眼しているため、左右の人さし指のくいちがいを腕や手の筋肉からの情報を受けた大脳の感覚領で分析し、運動領で調節する機能のよしあしを見ることになる。したがって、このテストの合格率が悪いということは「筋肉感覚の鈍化」(正確には「調節機能の低下」ということができる。そして、これらに関与する大脳の機能単位系は、ルリアの云う、第二ブロックと第三ブロック(第三ゾーン)の機能と考えることができる。しかも、子供が体全体を使って遊ぶことが少なくなった為に、このような機能の発達が遅れてきているということにあわせて、大脳の第一ブロックの機能の低下(覚醒水準の低さ)がこの機能の働きを十分保障していないということも加重されているのではないだろうか。

ルソーが「エミール」の中で子供に体力をつける前に、まず感覚器官をきたえるべきであると考えたことは、「エミール」のすぐれた部分として評価されているところである。彼が生きた時代には、筋肉感覚の鈍化というようなことは思いもよらなかったことであろう。彼が感覚器官をきたえようと考えたのは「五感」と「第六感」のことを意識したのであった。ところが、この筋肉感覚が鈍化してきていると

いう問題が浮かび上がってきている今では、「第七感」をきたえるという課題を意識しなくてはならなくなっている。このような筋肉感覚は「全身を使って遊ぶ」という経験のなかでしか発達できないものであるから、さきの前提課題を満たしつつ、質、量ともに豊富な遊びを保障しなくてはならない。行動体力が科学的な体力づくりの開発によって、高度のレベルに達してきているのに対し、筋肉感覚の発達の為に「遊びの時間が必要である」ということが、今改めて再認識させられてきているのである。

障害児の保育、教育の課題として、今まで取組まれているさまざまなこととあわせて、最近の子供の体のおかしさから抽出された「二つの課題」は、保育、教育の基礎的な条件づくりとして、また身体操作を確実に定着させるために、格別に意識的に取り上げられるべきこと gara であると考えられる。すなわち、大脳活動の「強さ」をより一層強くすること、朝から大脳の覚醒水準が高くなるように生活の工夫をすること、これらをさまざまな条件で何度も繰り返し、「体でわかる」まで体験させることを、保育、教育の課題として、より一層意識することが必要である。家庭では朝早く起きて、保育園や学校に行くまでもっと目がさめるようにするとか、寝間着を全部とりかえて冷たい空気で刺激するとか、冷たい水で顔や胸を刺激するとか、排便や食事をきちんとするなど、保育園や学校では授業や授業の前に、さらに目を覚まさせるような工夫をするということが、必要であることがわかる。また、日課の中に「遊び」を位置づけ、子供達がもっと熱中し、

それに持続して取組めるようなものを創造するということはもっと積極的に考えなくてはならないだろう。遊びに熱中し、それを持続するということは、大脳活動の興奮を強め、さらに抑制も強めることを要求するからである。心をワクワクさせる遊びは、大脳活動の「強さ」を高めるために、必須のものであり、同時に、子供が遊びに主体的に取組むための前提条件と考えることができる。しかも、全身的な遊びはこの「強さ」を高めるために、より有効であると考えられる。このような「全身的な遊び」を「体育的遊び」と呼び、障害児の保育、教育にとって不可欠なものとされるのは、このためである。また「遊び」は子供達を熱中させ、持続させ、繰り返しさせることになるなら、必ずや筋肉感覚を発達させるにちがいない。

### 3 障害の克服と体育

「全身的な遊び」は、教育の前提条件をつくり出すとともに、身体的発達の基礎的条件をつくりあげるという意味で、障害児の保育、教育課程における不可欠な構成部分として位置づけられてきている。とはいっても、障害児の保育、教育には、さらに障害を克服するということが加わるので、「全身的な遊びは障害を克服する」という課題の中に正しく位置づけられなくてはならない。ここでは、障害を克服し、可能な限り全面発達をめざす体育のあり方を考えてみたい。

「障害の克服」ということは、直接障害を受けているところの機能を可能な限りよくすることであるが、それが不可能であったり、不十分

な場合は、その周辺の機能を可能な限り発達させて、それで補っている。したがって、障害のあるところも、ないところも、全体として、可能な限り発達させようとすることに変りはない。障害があるところについては、障害の性質によって、しだいに悪化していくこともある。しかし、悪化を遅らせ、可能な限り生きるために努力することは、人間の発達をめざす取組みの一面とみるべきである。

また生命のある限り、いろいろな文化にふれ、それらとのかかわりのなかでより人間的になろうとすることは、人間の権利というべきである。そして、可能な限り、生存の自由度を拡大させ、また活動の自由度が拡大できるように努力することは、人間の進歩をめざす方向と一致した取組みと考えることができる。最近では、障害のない子供でも、発達のゆがみが様々に噴出してきているが、これらは、障害のために二次的に生じた問題（「二次障害」）と非常によく似ており、障害のあるなしにかかわらず、ある生活の仕方をしてることが原因で生じた問題であると予想できる。そしてこのような予想は、障害のための二次的に生じた問題は「適切な取組み」によって必ず解決できるという展望をもたせてくれるのである。

このように考えると、障害の克服をめざす取組みは、すべての子供の全面発達をめざす体育をきめ細かく行なうという取組みにほかならないということになる。

障害児教育のなかで、これまで「体育」として行なわれてきたものだけでは足りない、ということになり、「養護・訓練」が設けら

れることになった。ところが、この「養護・訓練」の実践のなから、「養護・訓練」を体育化しようという意見が出されるようになってきた。障害の克服を直接の課題として設定された「養護・訓練」は、子供にとって面白くないものであった。面白くなくても、それは障害の克服にとって必要なことであるから、何とかやらせようとするが、なかなか取組みにくいということであった。しかし、この「養護・訓練」に体育の授業の発想を取入れてやってみると、子供達が生き生きと課題に取り組むことがあるということが発見されたのである。「養護・訓練」の課題のなかに競争の場面を用意したり、競技の雰囲気をつくったりして、子供達が熱中できるような面白さの要素をみつけ出してそれをふくらませていくというように配慮されたのである。これは障害のある子にとって必要なことなのだから、何が何でもやらせなくてはならないという発想ではない。ここには、何とか主体的に取り組ませることが有効性を発揮するのだという発想がみられる。すなわち、子供の発達の原動力は、子供の主体的な取組みにある、と考える「教育的な思想」が、ここにみられるのである。

一方、体育の授業を「養護・訓練」化しようという意見も出るようになってきた。それは体育の授業で「体育文化」の「面白さ」をわからせようとするあまり、障害が克服できるような体を育てようとする配慮がなかったことに対する反省でもある。また、子供の障害の程度が年々重度化してきたために、体育文化の学習をさせることが非常に困難になってきた。その為に、体を発達させる課題を体育の授業のな

かですます意識せざるをえなくなったのである。障害児の保育において、全身的活動的な遊びを「体育的遊び」とよぶのは、このような遊びによって体の発達が期待できると考えるからである。たしかに、全身的で活動的な遊びは、体の発達に有効である。しかし、体の発達課題の体系と文化としての遊びの体系とは別々のものであるから、「体育的遊び」と云っても、体の全面的な発達を保障することにはなりにくいという問題をかかえている。ひとつひとつの遊びそのものは、子供を熱中させる面白さをもっているが、体の面からみると片寄りのあるものが多い。そのような片寄りのために、逆に面白さが出てくることもあるだろう。遊びというものはもともとこういうものであるとするなら「体育的遊び」というのは遊びのなかで体の片寄りがなくなるように、あれこれの要素をつけ加えるというようなことではないだろう。体の面からみて片寄っているそれぞれの遊びを、うまく選り出し、全面的になるようにアレンジしたり、発達段階における重点を考えていくところで「体育的」な配慮が生かされていくのである。したがって、全面発達をめざす時には、遊びの体系や運動の体系から考えることと、体の課題の全面性を考えることを、それぞれ別個に考え、それらを「体育文化」として総合していく必要があるのである。

最近では、このような「養護・訓練」と「体育」あるいは「体育的遊び」の問題を発展的に解決させようとして、たとえば大阪教育大学付属養護学校では、教育課程に「体」という領域を設けているが、この成果を見守りたいものである。どのような側面を主にして考えるにし

ても、全面発達をめざす体育を創造していくという現代的な教育研究の課題は、障害児の保育、教育のなかで確実に解決されていくものと期待したい。

全面発達をめざす取組みは、保育、教育施設の中だけで完結するものではない。「二四時間保育」という発想があるが、これは保育園で二四時間あずかるという意味ではなく、保育園と家庭と地域が協力して、二四時間の子供の生活をどのように送らせることが、子供の発達を保障していくことになるのかを考えていこうという発想である。

障害児の保育、教育においては、この「二四時間保育」という発想が、必要なことである。それには、施設や学校で何ができるかを考えることよりも、一日や、一ヶ月や、一年を、「自然環境」などを利用しながら、どのように生活するかをおさえることが必要であるだろう。少なくとも学校にくる二時間前には起きるようにしようとか、冷たい空気と水による刺激（内臓や筋肉からの刺激）を大脳に送りこんで、目をさませるとか、排便をきちんと行なわせるなど、家庭と学校の共同取組みとして、発達に必要な生活を創造していかなければならないだろう。

このような一日の生活時程の、きまった時間に、空気や水や湯などによって、一定の温度変化を与えていくことは、体温調節機能を高め、寒さの温度変化に強い体をつくることになる。「寒さに強い体をつくっておかなければ、風邪から肺炎を起こし、死に至るので、寒さに強くしたい」という課題を解決するための取組みが、わが国では「寒さ

に耐えられる体」という面だけで考えられ、薄着やはだかの保育を行なうところが多い。寒さに耐えることは、「寒さに強い」ということの半面であり、当然のことであるが、体温調節機能が十分に発達していない障害児を寒さに長時間さらさせることは、寒さへの馴れをつくる以前に、逆に外気に体温をうばわれて風邪をひく原因になる場合もある。したがって、寒さの変化に強い体をつくることを第一の課題とし、四季の自然の外気温や水温を利用した温度刺激を、一日の生活のなかで適宜に加えていくということは、とてもよい方法である。一日の生活のなかに、「たんれん（きたえるという意味より、環境の変化を意図的に組織してこれに順応させていくという意味）」の要素をとり入れていくことは、次に考えるべきことである。

さらに、太陽のある明るいうちにエネルギーを使い果たすような「生活のリズム」を、一日の生活のなかでつくり出していくことも必要である。

また、一日の生活のなかに、「遊び」と「労働」と「体養」を配置し、自律神経の調子を整えることの必要さは、云うまでもないことである。障害児の保育において、「午睡を行なうべきかどうか」は、一日の生活リズムをどのようにつくりあげていくのか、また午睡を必要とする活動の量や質があったのかどうかなどから、改めて検討されなければならない課題である。主体的に取組む遊びや、目的と役割をもった労働は、大脳活動の興奮過程と抑制過程を同時に強くすることに

障害児の保育、教育のなかでの体力づくりは、「先の目標」として位置づけ、ルソーの云う感覚器官をはじめ、体の諸機能や形態をひとつひとつ発達させようとする「体づくり」からとりかかるべきである。フランスの心理学者、H・ワロンが「精神発達の心理学」（大月書店）のなかで示している（精神機能の発達の順序）ように、まず体を動かすことが、「快い」というような「感情機能」を発達させ、それに先導されつつ、さまざまな「運動機能」を発達させる。さらにそれらの機能に先導されつつ、「認識機能」と「人格機能」を発達させていくという、長期的な人間形成の展望に立って、ひとつひとつの機能を可能な限り発達させることが、必要である。

このように精神機能はお互いに関連しあっているが、それぞれは独自の発達機構をもっている。身体機能についても同様なことがいえる。寒さに応じる体の機能と、暑さに応じる体の機能は別個のものである。寒さに耐えるのは、ホルモン系の機能であるのに対して寒さの変化に応じるのは神経系の機能であるというように、ここでもそれぞれ別個の機構と考えるであろう。このようにみると、人間を心身二元論でみることも、心身一元論でみることも間違っており、「心身多元論」としてみなくてはならないことがわかる。そしてこのような多様な要素が、一つの統一体として保たれているのである。例えば、われわれが、子供達の土ふまずをしっかりとつくり上げたいと考えて取組むのは、平衡がよく、しかも効率よく歩くことのできる「人間の足」に育てたいと願うからである。そのことが直接、性格をよくしたり、運動

神経をよくするわけではないから、この取組みに過大の期待をかけるべきではない。しかし放っておいても、そのうちに自然にでき上っていくというほどの生活環境ではなくなってきたるので、全面的に発達した体に育てたいと願うなら、無関心でいてよいということではない。子供によっては、足のことから体全体に関心が向いていく場合もあるうし、背すじのことから体への関心が広がるということもあるう。そしてそこから、自己運動（みずから体を発達させようとする）がこることもある。体や心は多くの要素からできているが、そのなかのどこかが軸になって、全体が動き出す筈である。そしてそこを中心としながら、自己運動を継続させるのは、意思（大脳の前頭葉の働き）の力である。近い目標から遠い目標につなげて、生きる目的意識を育てていくことができればしめたものである。

全面発達をめざす取組みにおいては、教育の課題をみつけるために分析を恐れてはいけない。人間の体や心は多くの要素からなり、しかもそれぞれの要素の発達の条件も違うために、この分析を恐れると、見当違いの対策になってしまうことが多い。

しかし、それぞれの要素が全体として統合されているために、実践としては、なるべく全体が動き出すような課題をみつけ出し、それに重点を置き取組むことが必要であろう。

われわれが、体を全面的に発達させようとする時、①「体そのもの」と、②「体の操作や運動」とを区別して考えてみるとわかりやすい。さらに、③「体の意識」を加えることがある。

①については④受容器、⑤脳、⑥効果器（内臓、筋肉）と分けて考えるほか、骨・皮膚・脂肪・血液、さらには土ふまや背骨、肥満などの形態まで考えていかなければならないだろう。

体そのものを発達させていこうと考える場合、歩かせることに取組んだら側彎が出てしまったとか、肥満対策としてマラソンをはじめたら、負荷がかかりすぎて足を痛めてしまったというように、一つのところに眼を向けた対策は他のところにマイナスの効果を引きおこすことが少なくない。徐々に、そして細心の注意を全体にむけながら、マイナスの効果を早く発見し、適切な処置を構じ、対策の修正をしなくてはならないだろう。

障害を克服するためには、可能な限り体力をつけておかなくてはならないと考えて、きたえ過ぎる場合もある。非常に体力がついて、自信をもって働くことが出来るようになった障害者が、三〇歳をすぎたから老化が早くなり、障害の進行も早くなってしまったという実例もある。あまりきたえ過ぎるのも問題がある。

②については、①さまざまな動作、②動作と動作との組合せやつなぎ、という見方と、運動の特性から考えた、③個人運動、④対人運動、⑤集団運動という見方もある。さらに現実の生活や文化の面から考えて、⑥日常動作、⑦労働動作、⑧スポーツ、⑨おどりに分類する場合もある。これらを学校での教材としてとりあげる場合には、このなかのエキスがとり出され、まとめられて、例えば、①と⑧は「体操」、⑨は「スポーツ」、①は「ダンス」として、子供が取組みやすなもの

に加工される。あるいは、キネシオロジーの立場から、①平衡を維持する運動動作、②自分の体を動かす運動動作（移動運動を含む）、③他の物を動かす運動動作、④動いているものをとめる運動動作（止まる運動を含む）、と分けて考えることがある。それぞれ分類されたもののなかの典型的な操作や運動は、何とかうまくできるようにさせ、運動の自由度を拡大させたいと願うからである。

このような「体の操作」や「運動の学習」の場合、意識しなくてもできるようになるまで練習をすることがあるが、あまり同じ動作をくり返しすぎると、それが固定されて、次の動作の習得のさまたげになることがある。少しずつ条件を変えて、動的なステレオタイプをつくりあげるように配慮する必要がある。

このような動作は、自由な遊びの中で、見よう見まねで習得できることもあるが、この方法で全員がうまくなれるとは限らない。全員の発達を保障するためには、どうしてもその動作や運動の習得を課題とする課業が必要となってくる。ひとりひとりに、言葉をかけ、言葉を動作にともなわせて、運動のプログラムを大脳に正確につくらせるような、きめこまかな取組みが要請されるのである。

このように、障害を克服し、可能な限り全面発達をめざす体育では、「課題が全面にわたっている」こと、また、「すべての者に発達が保障できる」ようにすみずみまで心をくばり、「集団の力でそれを可能にしてい」ことが、必須の条件であるということが出来るだろう。

# 引用文献

- (注1) 千葉康則著・「脳―行動のメカニズム」・日本放送出版協会
- (注2) 田中晴美・福山幸夫著・「小児神経学の基礎・診断と治療社
- (注3) ボイター著・富雅男訳・「乳児の脳性運動障害」・医歯薬出版
- (注4) アクサリナ著・伊集院隆訳・「乳幼児の保育」・新読書社
- (注5) 高口保明著・「赤ちゃん体操」・立風書房
- (注6) 坂元正一著・「胎児医学」・同文書院
- (注7) ワイズマン著・茂木俊彦訳・「ちえおくれの子の運動機能と脳」・ミネルヴァ書房
- (注8) 岡本卓夫・藤村陽一共著・「幼児の運動あそび」・ひかりのくに株式会社
- 巡静一著・「からだをつくる体力づくりゲーム」・明治図書
- (注9) 河添邦俊・平野日出男共著・「どの子もすばらしく生きるために」・明治図書
- (注10) 河添邦俊・長原光児著・「障害児の発達と遊び」・ぶどう社
- (注11) 西條修光著・「子どもの大脳活動の変化に関する研究」・日本体育大学紀要第十号
- (注12) ルリヤ著・鹿島訳・「神経心理学の基礎―脳のはたらき」・医学書院

## 参考文献

- 1 河添邦俊・正木健雄・矢部京之助共著・「障害児体育の考え方」・大修館書店
- 2 宮崎直男・他共著・「精神薄弱児指導の実践」・第一法規
- 3 渋谷敬三著・「学校保健法の解説」・第一法規

- 4 森昭著・「人間のための教育―幼児編」・日本放送出版協会
- 5 蜂尾慶著・「人間のための教育―少年編」・日本放送出版協会
- 6 小野三嗣著・「健康をもとめて―乳児期」・不昧堂出版
- 7 小野三嗣著・「健康をもとめて―幼児期」・不昧堂出版
- 8 小野三嗣著・「健康をもとめて―児童期」・不昧堂出版
- 9 猪岡武・遠藤知見著「障害児理解と指導の基本」・第一法規
- 10 石河利寛・松井秀治著・「スポーツ医学」・杏林書院
- 11 山口薫著・「障害児教育論」・第一法規

(本学講師・初等教育)